

もちろん創造されたのだそうです。

1 2 3 ……は算用数字またはアラビア数字。I II III IV Vはローマ数字。一二三四…九九

十百千万億兆は漢数字です。漢数字は、数字の一種といえますが、あくまで漢字です。

名前には、一郎・健二・三枝子といったように、普通一般の漢字と漢数字を組み合わせたものがあります。

名字にも、三上・八木・五十嵐…というぐあい。名字で、数字を使っているものがあるので、それを取りあげてみます。

○名字が数字だけで出来上がっている実在例――

一	いち	大阪市西成区
一	はじめ	熊本県宇土市
一	かず	大阪府南区
一二三	ひふみ	東京都足立区
二九	ふたく	京都市下京区
三五	さんご	新潟県柏崎市
五三	いつみ	東京都豊島区
五六	ふのほり	宮崎県
七五三	しちごさん	東京都新宿区
七五三	しめ	千葉県小見川町
九	いちじく	東京都世田谷区
十	もぎき	徳島県坂野町
十一	といち	京都市
十二	じゅうに	東京都世田谷区

十三	とみ	東京都杉並区
十七	とな	兵庫県
十九	とく	長崎県
二十一	にそいち	京都市上京区
二十八	にそや	山口県
四十	よろ	北海道小樽市
四十	あい	東京都文京区
四十八	よそや	富山県
八十	やそ	大阪府北区
九十九	つくも	広島市
百	もも	東京都世田谷区
千	せん	東京都港区
千	ちひやく	京都市東山区
万	まん	京都市東山区
万	ばん	大阪府淀川区
万	よろず	東京都渋谷区
万	もも	東京都千種区
百	どど	東京都武蔵野市
百	やお	神奈川県川崎市
八百	はつせん	東京都世田谷区
廿千	さんせん	大阪府東淀川区
三千	じゅうまん	大阪府西成区
十万	しじま	東京都目黒区
四十万	ひやくまん	北海道小樽市
百万	ちま	東京都荒川区
千万	おく	大阪府西区

◎三五一男(さんご・いちお)氏談―東京都大田区在住・会社員―

「よく、ミゴとか、サゴとか、ひと様が見当でお呼びになります。読んで字のごとくサンゴです。新潟県の与板町や寺泊、柏崎などにある旧家の名字です。いま東京だけでも、三五という家は三十軒ありますよ。わたし名前一男・カズオでなくてイチオです。妹が百百子(モモコ)。母が三四(ミヨ)。じじいが八百蔵。ばばあが千四(チヨ)。おじが七五三(シメゾウ)。おばが一二三(ヒフミ)。名字から名前まで、数字一家です――」

漢数字は普通一・二・三――千と書きますが、とくに証券用などには改ざんを防止して
老式参――阡のような字面の複雑なものを用いることがあります。いわゆる「大字」です
が、阡陌という名字が兵庫県にあります。『せんぱく』と読みます。千万億(つもい)という名字があるようですが、わたしはまだ実在を知りません。

○意表をつかれる名字

字もやさしく、読み方も、すなおで普通だが、こういう字が名字となっているのか、と意表をつかれるような一字名字。これも一般の名字の觀念からすれば、名字としては特異な存在です。珍姓の一種といえます。

口	くち	耳	みみ	鼻	はな
腰	こし	息	いき	休	やすみ
式	しき	音	おと	形	かた
本	もと	雲	くも	雷	らい
霜	しも	方	かた	水	みず

なんと、珍しい名字もあるものだ。右の三十三種のうち、金木町には一つもないが、わが町の一字名字は、次の如しである。
幅 はば 山 やま 炭 すみ
油 あぶら 加 くわえ 君 きみ
民 たみ 門 もん 宅 たく
壁 かべ 坪 つぼ 花 はな
側 かわ 種 たね 渋 しぶ
咲 さく 運 うん 紺 こん

泉 いずみ 金 きん 今 こん
星 ほし 森 もり 盛 もり
金木町には、田のつく名字が五七(一三・八三%)もあるのだから田舎には相違ないが、近年は、住宅や建築物が都会風となり、田舎らしい素朴さがなくなってきた。

東京にも、大阪にも田舎はあった筈だ。ただ、政治・経済の中心都市となるにつれ、地方からの人々が、都会へ、都会へと集中し、まだ、名誉欲、権力欲、金銭欲の亡者どもが己の欲望を満たすために、自然を破壊し、人工的な機能優先の都市に造り変えてしまったのだ。

田舎の発展が、国の繁栄につながることであり、自然を破壊した者は、自然に屈服する時がくることを忘れてはならない。

文化的空間のあるところは田舎であり、健康で長生き出来る場所も田舎である。

安住の地、田舎。田舎万歳！

昭和初期迄の農家の姿

秋 元 惣之進

私達の生命は祖先に始まり、子孫につながると思うが、人が生存するには食・衣・住が必要であり、祖先や両親の難渋は生きる為、明日の幸せを願い、子孫繁栄の夢を見て黙々と悲惨な生活を送りながら、想像に絶する程の烈しい労働に満ちた環境に耐えて来た。明治、大正初期の人々から聞き、資料を集め、若かった頃の体験をいま一度振り返り、又、ややもすると若い人々は現代の充実した暖衣、住、飽食、有り余る物の中に埋まっているのを当り前と思うかも知れないが、祖先や両親が難渋の中に生きて来た姿を風化し、過去の世界に追いやる事は土中に埋もれた土器同様で有り、ここに当時の百姓と小作人の辛苦の姿を網羅し、綴って見る。

明治から昭和初期以前迄は、貧富の差がいちじるしく、特に旦那衆は（金持ちで資産がある）広い屋敷に大きな住家と蔵があり、屋敷一杯に塀を回し、村の旦那衆の風格を構えていた。

今と違い屋根は萱葺きであったが貧農の住家は大抵、藁葺か良くて萱葺きの小さな家で、屋根には苔が生えていた。百姓の住家の間取りは、

分家や別家に祝言や不幸がある時は、本家の主人に指示者の資格を与え横座に座させる。「シボド」の横座は権力の座であろう。

昔は、「サルケ（泥炭）」藁、柴木、乾草など暖を取るに焚くので「シボド」は大きく造られた。横座に近い所が火を焚く位置で、岸元は火から少し離れておる。家族の中で身分の低い嫁は夕飯を終えると、後片付けをして下座の岸元に座るが岸元は入口から風が入り寒い。嫁は長く火にあたっておると家中に気兼ねであるから少し手を温めて藁仕事や針仕事をやる。

食事の時も序列が有り、主人は上座、右側の上が長男、其して次三男、左側の上が主人の妻、長女、次女とお膳の並べ方にも序列が固く決められ、嫁は一番下座であった。嫁は例え、長男の嫁であれ借子同様に仕事をさせられ、家の中の他人で有り、冷たい目で見られ、重労働の辛さと多くの悲劇が有ることを、弥三郎節が露骨に物語っておる。

貧農の小作人の住家は、土台も無く、柱を土中に埋めた堀立小屋同様の家であり、入口は戸の代り箆を下げて出入りした家も少々あり、居間は地面に籾殻厚く敷き其の上に藁を重ね更に箆を敷いたと言う。堀立小屋は大正末期で姿を消したが夏になると蚤（人畜の血を吸い、刺されると痒く、びんびん跳ねる）の温床で箆の下から湧いてどうする事も出来なかつたと言う。

昭和二〇年代頃迄は困ったものに虱（人畜に寄生して血を吸い痒い）で季節外れ無く年中だから閉口する。下着の縫い目に虱が列を作っているのだ。身体が動いている時はなんとも無いが身体が温まると血を吸われて痒くなる。取っても取っても何処から湧くのか出てくる。暖かい天氣の良い日に外で女同志が頭髮を分けながら虱を取っている姿がおもい

台所、ミンジャア（流し場）、寝室、土間、作業場、稲べ（稲置場）、馬屋、馬草切場が有るのが旦那衆の住家であった。

屋根を見ると大抵の家では「ハッポウ」と言う「シボド（囲炉裏）」の煙の出る所があり、便所は「ヒンツ」と呼び、大抵は住家より二〜三米位は離れていた。大正末期迄は「ヒンツ（便所）」に行き用便を終えたとお尻を拭くのに稲藁を小さく丸めて尻拭いをしたが当時は紙が貴重な品で貧富の差に拘らず何処の家でも藁か乾草で尻拭いをしたと、古老達は語っている。

戦後迄は家庭内にも身分制度があり「シボド（囲炉裏）」に座るにも序列があった。

自分の家の「シボド」の横座に座るのは貧農であれ小作人であれ「シボド」の横座には絶対に主人が座った。例え主人が不在であっても、妻であれ、子供であれ「シボド」の横座に座るのは絶対に許されない。例え目上の来客が来ても横座には主人が座り、来客には右側があてがわれ、妻や子供達は左側の「シボド」に座る。

出される。又、女達の頭髮に「ムスノ子（虱の卵）」が寄生しているから「掬櫛（目の細かい櫛）」で虱の卵を掬うて取っている姿が少々あった。

春、冬を問わず祖母や母は子や孫に「囲炉裏」で昔ッコ（昔話）を語りながら、子や孫の肌着を焙ると肌着にいた虱が熱さに耐えて「囲炉裏」に虱が落ちて子供達は、また、落ちたと喜んだ。戦後、DDTが開発普及して虱や蚤は全滅した。

中農以上の農家は耕作面積も多いから農耕馬を飼っており、馬屋の上「マギ（馬屋の上の部屋）」がある。「マギ」は二階の様に聞こえるが天井裏で借子を雇っている家では「マギ」を寝床に与えるが「マギ」は小さな硝子一枚付けた薄暗い天井裏である。

借子は「マギ」で寝起きするが、一日中の束縛と重労働に疲れ果てた借子は「マギ」は自由の憩いの場であった。娯楽に恵まれなかった当時の若者達は「マギ」で酒を呑んだり「トランプ」や世間話に花を咲かせた。疲れはてて寝るので「ランプ」を消しのを忘れたり、友達が多く集まると「マギ」の垂木が折れたり、又、寝惚けて落下する事もある。

借子は前借りの年季奉公人で昭和初期迄は

十才〜十一才迄は 米 二斗
十二才〜十三才 〃 一俵
十五才頃で 〃 六斗

十六才〜十八才 〃 三俵〜五俵
二〇才頃で 〃 六俵〜十俵
上借子で 〃 十俵〜十二俵

上借子は一人前の借子で、百姓の仕事は何んでも一人前の仕事をやらなければいけない。

借子は一旦、雇われると一年間はお盆と正月休み以外は生家に歸る事が出来ないと言う。

借子の期間中は、雇主の決めた仕事に指示には不平不満があっても絶対に文句を言わない事。

如何なる仕置きにも背かない事。身勝手な振る舞いはしない。などと契約書を取り交わして言うが、小作人の次、三男の大半は借子に売られた。借子は雇主の家族が食事を終った後で無ければ飯を食へさせなかった。

昭和初期、私が幼少の頃に耳にした話であるが、俗に「借子飯」と言う言葉があった。雇主の家族が夕食を終った後で借子が、ご飯を食べるので「めし」は冷え、おかず（副食）は家族が平らげてしまうので最後に残った「おかず」は漬物か野菜汁だけで、一週間に一二度は塩鱈か鱈漬の辛酸薄身に切ったのが一切位だったと言う。

十一、二才か、そこらの子供が借子に身売りして働く姿を見ると暗いイメージが見えた。

雇主は最初に十一、二才の子供を借子に雇う時は留守番か馬の手入れと言う名目で雇うのだが、主人は日増しに仕事を言付けて春先には苗代に連れて行き、薄氷が張っている冷えた苗代の水の中に素足で入り、苗代掻きをさせられる。素足で苗代に入るので足は眞赤になり、痛みを覚えるが主人が居るので我慢しなければいけない（当時は長靴が無かった）。

苗代が終わると田圃の堰堀り、畦畔の「メグロ」回す。次々と仕事がい付けられる。

いよいよ田打である。田打は馬耕で無かった頃は、三本鋤で一株一株耕起したと言うから手に「マメ（水疱瘡）」が出来て「マメ」が潰れ、手一面に広がり手から水が流れるなど痛い田打が終わらないと治らなかつた

へ 田植は泣く赤ん坊が欲しや

畦に腰かけ乳呑ませるに良いから

あまりにも厳しい重労働で休息が欲しいから唄ったのであろう。田植は何処の寄り合ひ（組合）でも一週間以上も続き、ようやく広い田圃も緑一色になり農家はホットひと安心するが田植が終わっても主婦達は朝、早く起き家族の食事の支度、子供達の世話、其の間に畠に行く。夕飯の支度、後片付けと目の回る程に忙しい。

男共は、其の間、田圃の水の掛引を見回り、馬に与える草刈り、草切り、厩肥出しと寸分の暇も無い。百姓は余暇も無く粗食に耐えほろほろの粗衣を身に着け、田植え草刈り田の草取り、稲刈り、島立、山へ行き燃料の薪切りと力仕事と四つんばいの重労働が農家の男女を早く老けこませ、老化が進むから三〇、四〇代頃になると百姓の男女は「爺コ」「婆バ」と呼ばれ、無理が重なり神経痛其の他の余病が誘因して人生五〇年の短い終止符を打った事である。

田植が終わると「サナブ（田植終りの休日）」である。そして虫祭り、若い人は二、三日休むが此の間に抜け田（補植）を植えに行く。

（虫祭りについては第八集を参照）

抜け田が終わると田の草取り。私も数十年間体験したが、一番嫌いなのは田の草取りである。

お尻を太陽に向けて四つんばいになり一株、一株、稲の回りの草を両手で掻き混ぜて取る。

二七、三〇度もある夏の炎天下、汗が「だらだら」顔にしたり、身体と所かまわず流れ、腰が「ギクギク」痛く鳴るが我慢しなければなら

と言う。

又、昭和初期に入り馬耕になると田打や田掻きは「サヒトリ」と言う馬の顔に六尺位の棒を着け馬を眞直ぐに誘導し、一日中歩くので少しでも曲がると主人は頭から「ガミガミ」叱る。朝早くから一日中の歩きっぱなしの「サヒ」取りの身体は綿の様にたくたく疲れれる。

女の子も十一、二才位になると貧農の子は他家に「アダコ（子守役）」として出され、雇主の赤ん坊や数人ある子供の面倒や家の中の掃除、庭掃除、ご飯炊きと目の回る程の忙しさである。特に十一、二才の可愛い吾が子を借子や「アダコ」に出した両親は日夜、心を痛め蔭で泣いた事と思うが、貧農の小作人には口減らしと生きる為にはどうする事も出来なかつた。

苗代の苗も一段と青く伸び、いよいよ、田植の準備も整え、入梅に入ると田植である。農家の主婦は自分の家の田植には、朝、一時か二時頃に起きて「ヨリアイ（田植組合）」の人々全員（十二、十五名）の食事（一日一人当り四、五食分）の支度をして田植女と一緒に田圃へ行く。苗取りは朝、暗い内から出て苗を取るが冷たい泥水の中で素手、素足で四つんばいの重労働だ。一服休みになると酒徳利を傾けながら飲み始める。身体の冷えと疲れを癒しながら世間話に花が咲く。

田植の女達も一服やお昼には弁当から色々な「おかず」を出して喰べ世間話に余念がない。田植の頃は梅雨期で肌寒い日が続く、素足に素手で泥水の中に入るから、身体が冷え手足が震える。特に若い嫁達は朝、早くからの四つんばいの重労働で腰が痛く疲れる。

民謡の一節にも

ない。炎天下には堰に入り冷水を求めるが、堰の水もお湯同然で効き目が無い。夕方には夜蚊が顔、身体と所かまわず刺すのでまるで生地獄のようだ。

夕方近くになり両親の帰りを待ちきれず、大きい子が乳呑児を背に負んぶして遠くから「アパー」と叫びながら迎えにくる。

乳呑児は母親を見て跳上らんばかりの泣き声で乳房を求める。母親は畦に座り母乳を与えるが空腹なのか両手で鷲つかみに乳房を掴み「グウグウ」と飲んでいる姿は母子の愛情が、実に美しく見えた。

嘉瀬では田の草取りの頃になると水田の水が不足になる。雨が降らないと水田は次第に干し上がり亀裂が見え始めるが、そうなると湯の沢の小田川上流に行き、雨乞いに行く習慣があった。雨祭りは村の坊主（僧侶）二人を連れて行き、藁で「インッコ（嬰兒籠）」を作り嬰兒の藁人形を「インッコ」に入れ、お菓子や野花を入れて瀧の上から嬰兒を入れた「インッコ」を下流に落として嬰兒が瀧から落ちたとみんな泣き、雨が降る様にと天を仰いで拝み、其の後、お酒を呑んで帰宅するが四、五日中には不思議にも必ず雨が降った。

嘉瀬は昔から水田の水が不足だったので田圃へ夜水を引くに行くが、一日中の仕事の疲れで綿の様にクタクタになり、眠い目をこすりながら夜水を引かないと稲は枯死寸前になる。夜水は平均に配分する。夜水を引くに行くとき夜蚊が「プンポン」と身体にまつわりつき、ところ嫌わず刺すから筵や「ノマ」をかぶり、藁を身体の周囲に置いて焚くが、仮眠していると下流の田圃の人が静かに来て上流の人が眠って居るかどうか、

そうと来て見て、眠って居ると堰の留板を揚げ、取り外して姿を消すから仮眠も出来ない。我田引水だ。其の内に夜が明けてくる。水田を見ると水は薄掛りであるが今日、一日の仕事があるから朝草を刈って歸る。

嘉瀬から田圃づたいに中道の農道を真っ直ぐに西に向かって、約二K余り行くと十川の河岸に三八町歩(約三八ヘクタール)を開拓した田圃がある。

この田圃は嘉瀬では俗に菟田^{ウタ}または耕地整理と言うが、工藤保次郎氏が明治二六年、三〇才の時、村から選ばれて村長になり二七年間、村政に全力を傾け、工藤村政時代に荒地を開拓、耕地整理にしたと言う。当初の開拓事業は進捗しなかったが、飯詰川の余水を導入し、水車を利用したところ、荒地も立派な耕作田となった。揚水なので二三日目には田圃へ水車を踏むに行かなければならなかった。

当時は自轉車も無く菟田迄、夜明け前に徒歩で三K余りも行くが、水車は早い物勝ちなので、眠い目を擦りながら、朝、三時頃に起きて行っても先に水車を踏んでいる人があると家へ歸らなければならぬ。

水車を踏む姿は一見、楽しそうに見えるが足に力を入れないと水量が揚がらない。土用の炎天下は焼け付く様な日照りを頭から受け、裸同然、禪一本、全力で水車を踏むと「ザアーザアー」と水が押し流れる。水車には女や子供達も上って田圃に水を補充した。

私の母の実家では、昔、摺臼引きだったと言う。私もかすかに覚えて居るが五〇六才の頃迄は大きな「土ズルス」があった。

母から聞えた話であるが、「土ズルス」は縦一尺位、直径二尺四〇五寸

島立を立てるに良いと言う合図の太鼓が鳴らす。午後五時には稲刈りを止めて歸宅の合図の太鼓が鳴り響く。人々は稲刈りを止めて一斉に歸宅するが五時を過ぎても田圃に人の気配があると「番太郎」は其処へ、走って行き、時間が経過したのにもまだ仕事をして居るのかと「ガミガミ」怒鳴り、稲が盗難にあつたらお前の責任だと頭から叱りつける。

昭和初期迄は男は草鞋、女は「アシタカ」を履いて仕事をした。晩秋の早朝は霜が降り寒く、素足で草鞋「アシタカ」の稲刈は気温が緩む迄は、手足が眞赤になり、身ぶるいする程に冷たい。稲刈りは一株、一株、小さい鎌を持って素手で刈るので両手足はヒビとアカギレで傷口からは血が滲み出て指が曲がらぬ程に痛いので、ソコデ(布に飯粒を塗ったもの)を貼るが数時間で剥ける。

其の年に依って雨が降る稲刈りには田圃が泥で足が濡かるから田下駄を履く。田下駄は幅、一尺位、長さ一尺五寸位の板に藁で鼻緒を立てたもので、泥に吸いつくので、足に負担をかけながら稲を刈る。

午後三時の島立の合図の太鼓が鳴ると、刈り取った稲束を畦に運んで並べる。運んだ稲束を親爺が「ツナゲ(藁の芯を二本で結んだ紐)」を腰に下げ一本一本、畦に敷き稲束を交互に十二束を縛って畦に立てて行く。この島立の立てるのが、腰がギクギク鳴り、折れる様に痛いのが腰を伸ばし伸ばしして立てる。午後五時には作業終了、歸宅の合図の太鼓が鳴る。短い秋の日を寸分を惜しみ、四つんばいの重労働に励む百姓は宿命的なものであると思う。

刈取って畦に立てた島立を約、二週間位おくと、七〇八分位、自然乾燥する。強風が吹くと島立は転ぶので起こしに行く。其れから稲乳穂を積む。稲乳穂は大抵、農道に積むと便利であるが、農道の無い遠い田圃

位の上下、二ツ合せたのが摺り臼で、竹で丸い輪を造り中に白い粘土を入れて固め、下駄の歯位の板を三分位づつ離して粘土を埋め、乾燥させて造ると言う。上の「土ズルス」も同じ方法で、上下の摺り臼を合わせ、歯と歯を噛み合せて調節し、手木(手木は摺り臼を回す木の手)を着けて土ズルスが出来る。白粘土は新町付近の表土を五寸位掘ると沢山あった。乾いた粃を摺り臼で三〇四人位で手木を押したり引いたり回して磨く。玄米にしても「ヌカ」があるので、更に唐箕に掛けて撰別して米搗きをして精米にする。摺り臼回しは大の男が裸になり汗を流して磨いたと言う。

百姓は暇を見ては筵織り、俵編み、縄なりと、寸分の暇も無い。馬を飼っている家では天気の良い日に「干草」刈りである(冬期間に馬に与える乾草)。

干草刈りはお盆前後の炎天下に、自分の田圃の畦や野山で刈るが、刈った後二〇五日位置いて乾燥させてから、裏返しにして天日で完全に水分を放出してから、かき集め、直径二尺、長さ四尺位に藁のツナゲ(紐)で二ヶ所、縛ったのが一丸で、十二丸が一ダンと言うが、長い長い冬から若草が生える春迄の馬の飼料で、十五ダン二〇ダン位ないと不足する。この干草刈りも炎天下の最中なので苦勞する。

春先から自分の子を育てる様に担当に育てた稲も秋になると成熟期を迎え、いよいよ稲刈りである。嘉瀬は田圃が広いので(六〇〇町歩余り)稲の盗難防止の為に村外れに番太郎小屋が建てられており、田圃の稲を監視する番太郎を二人出して昼夜、村の田圃の見回りをする。番太郎は、朝四時に、稲刈りに出て良いと言う合図の太鼓を鳴らし、午後三時には

は五〇米から二〇〇米も島立を担がなければいけない。秋は日暮れが早く何時雨が降るか分からないので、天気の良い日には子供達を連れて総動員で島立を担ぐに行く。稲乳穂は稲穂を真ん中(中心)に稲株が出ない様に積むが雨を防ぎ、風が吹くと稲乳穂の中に風が入り、稲が乾くからである。

稲付けは、稲乳穂から二四束づつ取り出し一丸に結び、馬のある人は馬に十二丸位づつ鞍に着けて家まで運んだ。瘦せた「ガジヨ馬(老馬)」は馬鞍に八丸か十丸が精一杯だった。馬が無い中農以下の小作人や、貧農達は稲丸を田圃から約二K三Kもある農道を草鞋を履いて六丸八丸づつ背負って稲を家まで運んだ。朝から晩までの稲運びは、人も馬も吐く息も苦しく、汗がだらだら流れ見るも悲惨な姿だった。家まで運んだ稲丸を其のまま大乳穂に積み重ねるが、熟練していないと稲乳穂の中に雨が入ったり、崩れそうになる。

家の前に積んだ大乳穂の稲を今度は「センコキ(千歯抜き)」に掛けて掬うたあと、粃と屑を分離して粃通しで藁屑と粃を分け、更に唐箕に掛け埃りを飛ばした。粃は当時六斗入れの俵に詰めた。此の六斗入れの粃を今度は摺臼に掛けるが粃の乾燥が悪いと砕け米が出ると言う。「センコキ」時代は稲束を素手で扱くので両手はヒビとアカギレ、マメ(水疱瘡)で血が滲み、今では想像もつかない程に難渋した。

春先から秋までの間、多忙な仕事に追われる農家の主婦は、朝星を拝み月影を踏んで歸るが、朝早くから嬰兒を「エンソコ(嬰兒籠)」に入れて、上の子供に子守役をさせて来た母親は赤ん坊のことがいくら、気に

掛かってもどうにもならない。忙しさに取られ長い間「エンッコ」に入ればなすだから「オシメ」が「ダラダラ」に汚れ、お尻が爛れて眞赤になっている。赤ん坊は母の乳が欲しく足が疲れているから立ち上がった泣く。夕暮れに村を通ると何処の家でも赤ん坊の、火の着く様な泣き声が聞こえた。「エンッコ」の底には「サンベエス（米俵の蓋）」を敷き、其の上に藁灰と藁シビ、小さい布団を敷き赤ん坊を入れて、周りを「エンッコ」布団で囲むが、赤ん坊の頃はどうか良いが、成長してくると暴れるので手掛けに背負帯を通して動かない様にした。

昔は無機質肥料（鉱物から取った肥料）も無く、有機質肥料（嘉瀬では「コイ」と言った植物や馬糞など積んで自然発酵させた堆肥）に依存したが、其れも旦那衆の馬がある農家だけで、小作人や貧農は馬が無から水田に「コイ堆肥」を施肥する事も出来ず、無肥料だった。其の内、天災や稲の病害虫が発生し、作の良い年でも反当四〜五俵の収穫が精一杯で、小作人は地主から反当二俵〜一石（良田）以上の年貢米を取られ、残るのは数俵だけで其れで生きて行かなければならなかった。

其の間に一〜三年の内には必ず干ばつ、北東風、冷害が常習的にやってくる。

嘉瀬は六〇〇町歩余りの水田を有しているが、農家の命の糧として耕作している水田が不思議にも幼穂形成期から出穂開花期にかけて豪雨が降り続き、岩木川の水流が逆流して旧十川、飯詰川、小田川が満水になり堤防決壊することがたびたびあった。嘉瀬の水田六〇〇町歩余りの内、二〇〇町歩〜三〇〇町歩余りが冠水し、田圃一面が海と化し、湛水は三日〜一週間も居座り、春から秋まで吾が子同様に愛情を持って育てた稲

る時は契約をするが、一年分の「タテマシ（前納米）」の小作料全額を前納し、秋の収穫時には正規に再び、小作米を納めなければならぬ習慣があった。

又、地主に依っては礼米と言ひ、一年分の小作米を四年〜五年に一回納める制度も有ったと言ひ、小作人は高い小作米を納める外に「タテマシ」や「礼米」を取られ地主は生血を吸う、吸血鬼の如く小作人から搾り取り、地主は、どっしり構えた城のような家を築き、邸宅に塀を周囲に高く回し、自分の思い通りの気取った生活にふけ、小作人を虫ケラ同様に振舞った。

地主や旦那衆は自分の資産と権力を維持する為に、小作人と貧農を支配と搾取の腹黒い目的で、百姓が学問を身に付けると批判的になるのを恐れ、無学分盲、無知に落とし入れる策略で、百姓は学問はいらぬ、仕事さえしておると良い、と言ひ、学問が少しでもあると地主は空骨やみだ（怠け者）、借してある水田を取るぞと脅かす。小作人や貧農は地主が借しておる水田、畑、屋敷を取られては死活問題で有り、地主には何時も平身低頭である。

この様に、地主の重圧に踏みにじられ、伸びる芽も摘み取られ、小作人は百姓だから仕方ないと諦め、権力と重圧に恐れて、蛇に睨まれた蛙で有り、牛馬が飼主の言いなりになる様に、長い間の宿命となり、不平はあるが地主の圧迫は当り前と意識し、自分の運命を開拓する能力も無く、無力が諦めとなり「学問」どころか、今日の糧にも事欠き「貧すれば鈍す」思考力も無く、寄生地主の抑圧に耐えながら、先祖や両親は身を犠牲にして吾が子の幸を希い、子孫繁栄を夢見つつ、貧しさからの開放、束縛からの自由の夜明けは何時の日か。と暮らしてきたのである。

—おわり—

は、一瞬の水害で全滅し、百姓は天を仰ぎ憎むにも憎めず、泣くにも泣けぬ悲惨さであった。

それでも、喰う為の糧として稲刈りをするが、冠水の水田には整粒は一粒も無く「スタダ米（屑米）」が少量、穫れるだけだった。

こうした天災は、一〜三年に一度は必ずあったが、洪水の来る田圃は小作人と貧農の田圃が主だった。この様に凶作の年は喰うや喰わずの農家が続出し、今日の糧にも事欠き、草根木皮、食いる物は何んでも喰べ、露命を繋いだ。凶作の年は嘉瀬からも十二才から二十才位の花の蕾みの娘達が、小さな風呂敷包みを持って「家の入口の前で、家族が泣きながら見送り、紡績工場や水商売に、口減らしと金銭の為に売られ、悪周旋屋に付いて行く後姿が如何にも哀れで有り、売られた娘達の大半は満期が来ても故郷に歸る事無く、倫落の果てに身を沈め、不幸な一生を送った。

又、男達も借子は勿論、北海道、樺太、カムツヤカに雇い人夫として身体を売り、中には生き地獄の「タコ部屋」に命を落とした不幸な人々もあったという。

今日の糧にも事欠く小作人と貧農は、牛馬の様に働いて居ると、自分の為と思ひ込み、其れを何んとも思わぬ百姓は学問は要らぬと思ひ込みであり、又、多少でも学問があると、この「空骨やみ（怠け者）」と家人からも理屈ばかり良くて怒鳴られ、世間からも白い目で見られ、陰口を言われるのがオチであった。

昔は小作人が地主から水田を借りて耕作しておったが、古老の話に依ると、金木区域の習慣で、小作人が新しく地主から水田を借りて小作す

中柏木の野面から消えたもの 原田万治

鳥

春五月、田起こし頃になると珍しい鳥がやってくる。

渡り鳥か、それとも深山の方から里にでて来るのかわかりませんが、その鳥の名を「ジンヤクタマシ」と呼んでいた。

その鳥の鳴き声はほかの鳥とは違ってすさまじい音をたてる。平行に飛んでいる時は「グウツ、グウツ」と大きな変化もないが、なにかのはずみに急上昇を始める。それも鳴き声の「グウツ、グウツ」が早いテンポで一五〇米ほど昇ると、そこから急降下してくる。急降下してくる時の音は「グウツ、グウツ、ググググ、ガアウ——」と七、八十米にわたって一気に垂直に降下してくるのだ。

「ガアウ——」という音が一番長くて声なのか、羽音なのかは識別しがたいが飛行機のジェット機の音とよく似ている。とにかく体型から想像してもすごい大きな音であった。

カッコウ鳥よりはかなり小さく目も短く、その鳥が中柏木地区でも三ノ沢の水田の上空の近辺しかみられない。多い年は五羽ぐらい、少ない年でも二羽はいた。その競演はうるさいほどであったが昭和四十年前後で聞くことができなくなった。絶滅したのでなければ日本の空のどこかで豪快な音をたてているであらう。

この鳥を見られなくなった頃は水田を耕起する耕耘機が、あちこちで動きまわっていたときでもあった。

太宰治とつれづれに

沢田 薫



疎開中の太宰治とは、三、四回ほど接触している。いつも木立民五郎

さんに従ってであるが、この日だけは山中正津さんと二人だけで、いつも仲間であった山中利幸さんも一緒であったかどうか定かでない。りんごの実はまだ小さかったので梅雨時であったと思う。正津さんの先導で中柏木部落の西側のりんご園を散策した。おそらくいつも自分のりんご園に居るはずの民五郎さんを訪ねるための道連れであったと思う。この日も太宰は和服の着流しで、しきりに煙草を吹かしていた。

りんご園には民五郎さんは居らず、それではと中柏木部落の原田僚さん宅を訪ねる。僚さんも当時ガリ版刷りの文芸同人誌「灯」の仲間であったので寄ったと思う。

当時僚さんも小説の真似事などし「春は壮快である云々」との小説の書き出しの言葉が今でも忘れない。僚家は中柏木の地主で家も広い、北側の座敷に招じられ、しばらく待つ間に高足膳が運ばれ一献となった。酒は当時は勿論どぶろくだったと思う。

文学論然り、諸々の話をしたと思うが、その時の話の内容は一つも記

憶にない。

帰る頃となり、僚さんいいところがある。太宰に色紙書きを所望し、書いてもらったのが、

思ひ煩ふな 空飛ぶ鳥を見よ

播可ず刈らず

藏に収めず

マタイ傳 太宰治

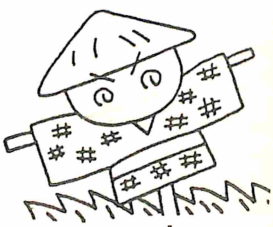
である。当時の紙は感光紙、その紙は太宰が持っていたのか、僚さんが持っていたのか、今もって分らない。原田僚家では宝物にしている。正津さんと、ときどき嘆くことがある。「おら達も当時その気であれば色紙でも何んでも何枚も貰うによかったのになア」と

後の祭りである。

聞き書津軽弁・嘉瀬言葉



木村 治利



「津軽の言葉、嘉瀬の言葉」について本誌第五集で取上げ、木立久二氏は「嘉瀬言葉は一般に悪い言葉の代名詞のように思われがちだが、一つ一つの単語を拾って見ると、語の起源が成立し、独特の言葉が生まれたとする」と、津軽語の語源を書いている。

又、山中正津氏は「何百年と続いてきた津軽弁、嘉瀬言葉はその時代で、その地域において十分に意志の疎通が図られたものであり、今でも我々の年代の者は使っている。」と

我々津軽衆にとって、素直に、率直に語りあっているのは、やはり津軽弁である。しかし、その津軽弁も時代の進展に抗し切れず、知らず知らずのうちに一語又一語が死語となり、歴史の彼方に消えてゆく。

先人たちが意志疎通に、文化進展に使用した津軽弁という遺産を残したい。

津軽弁は、地域や個人によって発音のしかた、濁音のつけかたが違うことがある。それは「イ」と「エ」、「シ」、「ス」、「ヒ」と「ヘ」等の区別が明瞭でないためである。従ってこの記録は聴いたままを五十

音別で記したのである。この津軽弁の中には、アイヌ語、古語等種々雑多であろうと思われるが、津軽の人々が日常使用している言葉を、古老たちに聞き集めたものである。

例えば「そうですね」という言葉を、嘉瀬言葉では「ソングデバ」というが青森地方では「ソングデー」と押しつけるようにいう、弘前地方では「ソングネハー」と相槌をうつ、感じである。

又、個人によっても「教えてくれ」という言葉を、嘉瀬言葉では、「シラヘナガ」という人と、「サヘナガ」という人とがある。「冷たい」ことを「サッコイ」「ヒヤッコイ」と人によって違う。

しかし、津軽衆には何ら抵抗を感じない。それが津軽弁の暖かさ、深さ、豊かさなのかも知れない。